

1810年代の麻沸湯による全身麻酔下の 乳癌手術患者を描いた図

——春林軒門人雨森良圭描写による全身麻酔下患者の2図——

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

受付：平成29年10月28日／受理：平成30年5月9日

要旨：1813年に春林軒に入門した雨森良圭は1810年代に「婦人乳論翼」を記したが、これは青洲の乳房疾患治療の講義を筆記し図を描いた記録である。この写本には7図が含まれており、4番目の図は麻沸湯による全身麻酔下にある乳癌患者の手術直前の図で、5番目の図は別の乳癌患者で、創口から多量の出血が認められる図である。その説明文は詳細で、いずれも良圭が実見した症例と考えられる。1810年代の麻沸湯による全身麻酔下の手術患者を描いた図はこれまでに知られておらず、この意味でこれらの2つの図を含む写本は麻酔科学史的に重要である。

キーワード：雨森良圭，婦人乳論翼，麻沸湯，乳癌手術，1810年代

はじめに

華岡青洲（以下「青洲」と略）の外科手術，中でも乳癌手術に関して多くの図が遺されている。これまでに知られている最も古い手術図は「乳巖治験録」¹⁾の中で言及された藍屋 勘に対する乳癌腫瘍摘出手術の全5図であるが，残念ながら原図は失われた²⁾。呉 秀三は「華岡青洲先生及其外科」³⁾の中で5図の内4図を他の写本から転載したが，出典は不明で，4図自体も複数の写本から転載された形跡があり，原図とは異なっている可能性が高く甚だ疑問が残る。著者は原図に近いと思われる藍屋 勘の手術図を発掘して示した⁴⁾。これら「乳巖治験録」の5図はすべて患部を描いた図であった。

このように青洲が最初の乳癌手術の図を門人に描かせてから，春林軒では乳癌手術に際して図を描くことが慣例となったようで，極めて初期の数例を除いて，1810年代までに行われた多くの乳癌手術の図が遺されている⁵⁾。以後，時を経るに

従い，図の対象となる手術は乳癌手術だけに留まらず，他の稀有なる疾患の手術にまで及んだ。そして，図譜としてまとめられたのがいわゆる「奇患図」で多くの類書が作られた。図は画家によっても模写された。この中で最も有名なものは，青洲没後の1839年に画家端月が描いた彩色の図譜で，89図を収めている。その詳細は呉の著に「華岡家治験図巻第一」⁶⁾として解説されている。呉の著書では図は省略されているが，彩色でないもの「南紀徳川史」に大半が覆刻されている⁷⁾。このように夥しい図が描かれたが，殆んどすべては患部を描いた図であり，華岡流医術の最大の特徴である麻沸散（湯）投与による全身麻酔下にある患者を描いた図は全く見られない。著者は18本の「奇患図」類を調査したが，同様の結果であった⁸⁾。

中には，確かに全身麻酔下にあると思われる患者を描いた図もある。例えば，前記「華岡家治験図巻第一」⁶⁾の第7番目に示された症例で，眼鏡をかけた青洲が，患者の右手に座って頸部の粉瘤

を切除している図で、呉もその著書の他の箇所でもこれを示している⁹⁾。患者は枕をして仰臥しており、これだけでは、全身麻酔下にあるか否か判断できない。説明文には「青洲翁下刀而取粉瘤之脱塊也。紀州 湯浅伊兵衛」とあるが、麻沸散(湯)に関連した記述は一切ない。確かに春林軒で行われた手術であり、麻沸散(湯)下の全身麻酔で行われたと推察されるが、それを証する記述がなく、さらにこの手術が行われた時期も分からない。以上述べたように春林軒における全身麻酔下の手術患者を描いたと証明され、しかも年代が特定できる図はこれまでに一つも発見されていなかった。

今回、著者は春林軒門人雨森良圭が1810年代に描いたと思われる乳癌手術2例の図を発掘したので、2, 3の解説を加えて紹介したい。

1. 春林軒門人雨森良圭について

雨森良圭(以下「良圭」と略)についての詳しい履歴は知られていない。「華岡青洲先生春林軒門人録」によれば、近江の部に「文化一〇(1813)、四、二一 伊香郡柏原村」とある。「(1813)一松木注」¹⁰⁾「(近江国)伊香郡柏原村」は現在の長浜市高月町柏原(たかつきちょう・かしはら)である。後に春林軒の塾頭を務めた稲川梁策(1812年3月23日に入門)に次ぐ近江からの入門者であった。長浜市の雨森正高氏(長浜市高月町雨森で開業。なお「雨森」は「柏原」の隣の地区である。)は偶々、柏原に居住されている雨森俊彦氏から祖先の墓碑について教えられた¹¹⁾。その碑文に良圭は青洲の門人とあったので、以来、雨森正高氏は良圭を含めた近江出身の春林軒入門者について調査し、1995年に良圭の菩提寺、養浩庵(高月町唐川)を訪ね掃苔し、その顛末を「滋賀県医師会報」に発表した¹²⁾。

それによれば、碑柱の正面には「壽光院甘山道雨沙弥(過去帳には「壽光院耳山道雨沙弥」とあるという。「甘」と「耳」のいずれが正しいか俄に決し難いが、一般的には過去帳の記載をもって正とすべきであろう。)とあり、右側面に「辞世／ましらや／月花の外に／友なし 笠の旅」が刻

まれている。左側面には良圭の略歴が漢文で以下のように記されている。読み下し文にして示す。

君、諱は信重、字は良圭、姓は雨森、滄洲と号す。世、近江の国伊香郡柏原村に住む。

君、夙に先業を承け、南游して青洲花岡翁の門に入る。刻苦して漢蘭の医学に勉強し、通ぜざる所なく業成りて歸る。其の名、遠近に震う。門下に治を請う者、常に絶えず。其の病理を考究し、患者を救済すること孳々として怠らず。君の如きは所謂良医たるものか。性は清廉にして世俗に徇(したが)わず。傍ら俳諧を好みて、自ら称して猿屋笑樵(ましらや・しょうえい)と曰く。文久元年辛酉五月二十九日、壽を以て終わる。その生まれし寛政甲寅を距たること実に六十有なり。(括弧内一松木注)

これによって、良圭が1794年に生まれたことが明らかになった。春林軒に入門したのが、前述したように1813年であるから、19歳の時である。「青洲花岡翁の門に入る」とあるが、「花岡」と「華岡」は同音であるから、何ら問題はない。「夙に先業を承け」とあるから、親良圭¹³⁾も医者であったことが分かる。良圭が何年間、春林軒で修業したかは知られていないが、碑文は他門で勉強したことに触れていないので、春林軒での業を終えて直ちに故郷に帰ったと推察される。以後、地域の医療に尽瘁して門人を教育し、その傍ら碑文にあるように俳諧を楽しんだ。後述するように、門人がいたことは明らかであるが、いつから子弟の教育を始め、生涯に何人ほどの門人がいたかなどについても明らかではない。

2. 「婦人乳論翼目録」について(図1, 2)

前述したように、良圭は1813年4月に春林軒に入門したが、いつ退塾したかは知られていない。塾頭などを務めた門人は別として、在塾期間は一般的には2~3年と見て差し支えない。長く見積もっても5年であろう。5年としても1818年中には退塾したことになる。円熟期の青洲の門人であった。良圭は在塾中、「婦人乳論翼」と題す

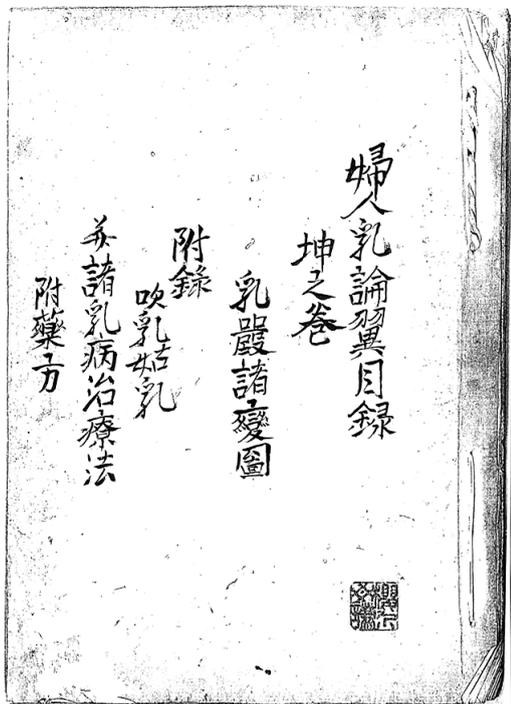


図1 「婦人乳論翼目録」

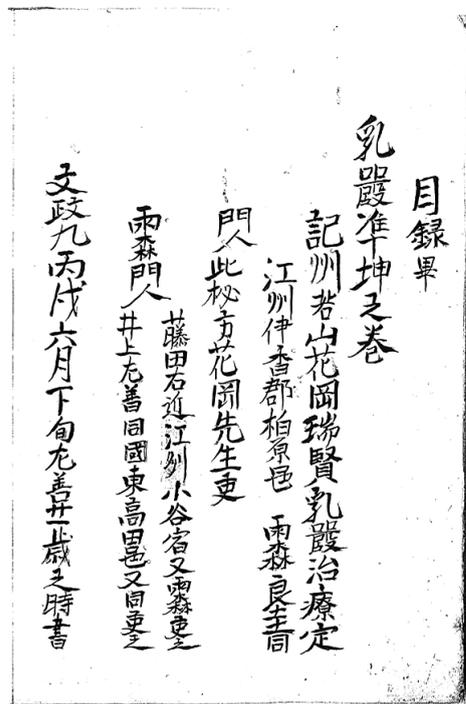


図2 「乳巖準坤之巻」

る書を作った。主として、青洲から学んだ乳房疾患、乳癌手術のことを記した書である。この書名は佐藤持敬の「華岡氏遺書目録」¹⁴⁾中に披見されないで、良圭が独自に付けたものであろう。

この写本はさる古文書収集家が、高月町に關係ある文書として高月観音の里歴史民俗資料館に寄贈したもので、2006年に雨森正高氏がその内容の検討を著者に依頼された。以来、著者はこの写本の内容の検討を行ってきたが、今回、漸くその全体を理解することが出来た。

後述するように、この写本は良圭自身の手になる原本ではなく、その門人井上左善による1826年の模写本である。良圭による原本、さらには井上の模写本の「乾之巻」は失われて現存していない。書写者の井上についても、1826年当時、良圭の門人であり、満20歳であったこと以外、一切不詳である。もちろん春林軒の門人でもない。

まず、簡単に「婦人乳論翼」の書誌について記す。本写本は「乾坤」2巻の中の「坤」の巻のみで、図1に示すように、縦24.6cm、横17.5cm、四ツ目仮綴じで、表紙を欠く。全18丁で、無辺無界、半

丁に9行墨書されている。1丁表は「婦人乳論翼目録 坤之巻」とあり、以下にその内容が「乳巖諸變図、付録吹乳姑乳、并諸乳病治療法 附録方」と記されている。その下方に旧蔵者「桜井謙介」の印(朱文)が押印されている。1丁裏は図2に示したように、井上左善による識語が記されている。2丁以下について分かり易くするために、以下のように示す。なおこの写本では「巖」の代わりに「巖」が使用されているのでそれに従う。

- 2丁表裏：「療乳岩図」(前文)、
- 3丁表：「乳巖不開図」
- 3丁裏：「乳巖少開図」
- 4丁表：「乳巖大開図」
- 4丁裏：「乳巖治療切初之図」
- 5丁表：「乳巖治療盛之図」
- 5丁裏：「乳岩治療仕上図」
- 6丁表～7丁表：見出しなし。(腫瘍摘出後の創部の処置や術後の養生について記述)
- 7丁裏：縫合の図。(図の下に切開創の縫合についての文)

8丁表：乳岩薬方之事

8丁裏：空白

9丁表～10丁表6行：乳岩準

10丁表後3行～14丁表6行：附録

14丁表後2行～18丁表4行：脚気翼

18丁裏：空白

上記の図は彩色ではない。総じて、文章は青洲の口述を良圭がそのまま筆記し、後に正確な文章(漢文)に直さなかったと思われる痕跡が諸所に認められる。例えば、「療乳岩図」の後から3～4行に「故へニ源従相談ヲ向卦ヲ可療也」(2丁裏)はルビ、送り仮名を参考にすると、「故へに源(もと)従り、相談を向い卦けて療すべきなり」と読むらしいが、これであれば、原文は「故従源向卦相談可療也」とならなければならない。また、「乳巖療治盛之図」(5丁表)の説明文の一つに「乳岩、塊リ少シニ而モ残バ又再作セン事ヲ手ヲ寧ニ療可為レ也」とある。末尾の句の「手」は「丁」に、「療可為也」は「可為療也」となるべきであろうが、いずれにしても口述の語順に従って書けば良圭の原文のようになる。このような例が散見する。文章にルビが付されているが、良圭の原文にすでにあったものかどうか不明である。井上左善が書写した際、理解できるように彼が付したものと解したい。

以上によって分かるように、この写本は良圭の「婦人乳論翼」乾、坤2巻の「坤之巻」で、「乾之巻」は散失してその内容の詳細は知られない。書名から推察するに、「乾之巻」の内容は、乳房疾患に関するものであったことは間違いない。具体的に言えば、「燈火医談前篇」の乳房疾患の項¹⁵⁾に見られるような、乳房の諸疾患の病理、症状などをまとめて記述したものと考えられる。識語の冒頭には「乳巖準坤之巻」とある。この「乳巖準坤之巻」は「乳巖準」の「坤之巻」という意味ではなくして、「乳巖準」すなわち「坤之巻」という意であろう。というのは「乳巖準」自体は極めて短い文章で「乾」と「坤」に分けて記すほどの分量ではないからである。以上から、「婦人乳論翼」の「乾之巻」には乳房疾患に関して一般的な

こと、そして、「坤之巻」には乳癌の手術に関連して図を利用して術前の状態、適応、禁忌、手術の実際、術後の処置・管理、手術前後に投与すべき内用薬、外用薬、鑑別すべき疾患などを記したとすれば、乾坤2巻全体の整合性が取れる。

1丁表の「婦人乳論翼目録」は「坤之巻」の内容を伝える「乳巖諸変図」、「附録 吹乳姑乳」、「并諸乳病治療法」、「附薬方」となっているが、本文とは大きく異なる。本文では「療乳岩図」、「乳岩薬方之事」、「乳岩準」、「附録 吹乳」、「脚気翼」となっている。

「療乳岩図」は都合7図を付して解説している。この中で乳癌の患部の状態を示しているのは3図、全身麻酔の状態を描いているのは2図である。術後の半座位の状態を描いているのは1図、創部縫合の状態を示しているのは1図で、それぞれ術後、縫合について解説文が付されている。

目録の「附薬方」は本文では「乳岩薬方之事」となっており、半丁に満たない文章で乳癌手術後に慣例的に用いられる「調榮湯」と「防風通正散」の処方を書いているが、後者について、連翹、桔梗、川芎、当歸、大黃、麻黃、防風、荊芥、山梔子、柴胡、薄荷、木通の12味とした処方を「雨森先生家之防風通正散」としている。生薬数を本来の18味から12味に大幅に減じた良圭による改変方である。これは「乳岩準」の一部と思われるが、次に「乳岩準」が記されているので、一部重複していることになる。「調榮湯(人參調榮湯)」は「乳岩準」の冒頭に見られる処方である。

目録には記述されていないが、本文には「乳岩準」が記述されている。乳癌手術の術後に定番として使用される内用薬、外用薬を記したものであるが、ここでは、人參調榮湯、當歸芍薬湯、野牛膏、家猪膏、樺(「呂仁」を縦棒で削除しているが、処方の中に含まれている一松木注)石膏湯が記されている。現在知られている最も古い1812年の「乳岩準」¹⁶⁾(この写本には「乳岩準附録」とあるが、これは「乳岩準」の誤記。この後に「附録(乳岩準附録)が記述されている)には、「調榮湯」、「歸芍湯」、「拔留沙摩擦泔客(バルサム コツハイハ)」、「野牛膏」が記されている。「拔留

沙摩格禰客」は良圭の「乳岩準」には見られない。しかし、良圭の「乳岩準」の「樺呂仁石膏湯」は上記の「乳岩準」¹⁶⁾には披見されない。このように他の写本との間に多少の出入りが認められるが、書き洩らしたのか、あるいは治療上の改善の結果、異なった処方を使い始めたのかは、俄には決せられない。

次に目録の「附録 吹乳姑乳」についてであるが、「附録」とは正式には「乳岩準附録」のことで、「乳岩準」の「附録」として、各種乳房疾患に対する処方を列記したものである。「吹乳」、「姑乳」はそれぞれ冒頭に披見される疾患名である。良圭の「附録」はほぼ従来の疾患名と処方名を踏襲していることを表1に示した。本来であれば項

表1 「婦人乳論翼」の「附録」と「乳岩準附録」の「附録」に披見される乳房疾患と処方

「婦人乳論翼」の「附録」 (見出しとしての疾患と処方)	「乳岩準附録」* (見出しとして○印のついた項目)
吹乳	集験連堯湯
姑乳	神効瓜呂散
集験連堯湯	二誉湯
連堯湯	連胡粉散, 鹿角散
神効瓜呂散	赤竜皮湯
赤竜皮湯	鹿角散
二誉湯	一醉膏
又方	前枯(「瓜」の誤記) 呂橘皮湯
鹿角散	后瓜呂橘皮湯
一醉膏	香魚膏
前瓜呂橘皮散	乳ノイギリ
后瓜呂橘皮散	又治シカヌルには端的丸
香魚膏	一方
乳頭裂	乳頭秋茄子
乳癬	乳癬
乳結核	土大黃膏
乳腫	乳結核
乳癰	乳腫
乳瘻	乳癰
	瓜婁橘皮湯
	神効瓜婁散
	治乳癰一方
	排膿散
	乳瘻久不癒者二方

*:「済美堂丸散方, 乳岩準附録」(京都大学附属図書館富士川文庫所蔵。請求番号 セ89)には単に「附録」として記されている。

目として疾患名が示され、それに対する処方が記述されるべきであるが、それらが整然と記されているわけではない。なお、「乳岩準」、「乳岩準附録」については拙稿を参照されたい^{17,18)}。最後の「脚気翼」は青洲の「脚気翼方」の全文である。

3. 「婦人乳論翼目録」中の乳癌患部の図について

「乳巖諸変図」は本文では図3に示すように「療乳岩図」となっている。乳癌の発症、経過、腋下への転移について述べられている。乳癌腫瘍が「開」いた場合、つまり潰瘍化した場合、また腋下へ「筋引ク」場合、つまり転移した場合には難治であるとしている。少し長い引用になるが、冒頭の漢文を読み下し文にして示す。

凡そ、乳岩は妙(わか)き婦人にはなし。多くは三十以上の婦にあり。乳巖、之を見るに当にその証を問う。乳巖の証は苦勞に由って此の

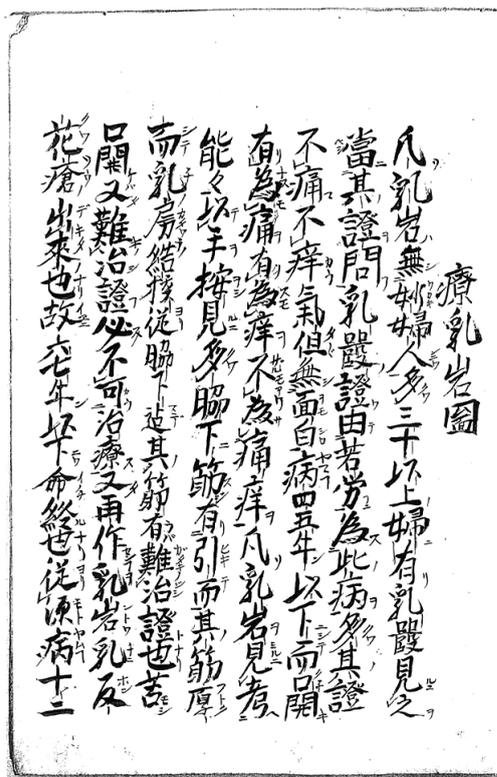


図3 「療乳岩図」

病を為す。多くはその証不痛不痒。氣、唯々面白なし。病むこと四五年以下にして、口開き痛を為すもあり、痒を為すもあり、痛痒を為さざるもあり。凡そ乳岩を能々考え見るに、手を以って按じ見るに、多くは脇下に筋引きてあり、その筋厚（ふと）くして、乳房の結節より脇下までその筋あらば、治難きの証なり。もし口開けば、又治難きの証、必ず治療すべからず、又再作（再発するの意）せん。乳岩とは乳に反花瘡の出来たためなり。故に、六七年以下には命終るなり。源（もと）より病むこと十二三年以上にして必ず死す。乳巖の口開くこと定まりなく、三年にして口開くもあり、又五年、又六七年。乳岩の証を問うに、多年数立つに及び、又乳岩に由って腫痛をなすもあり。口開けば必ず治療すべからず。手を以って核を探り見て、乳核、乳癰、乳泉（「癰」の誤り）、吹乳、姑乳と誤りて必ず治療すべからず。凡そ、乳岩の証、開きて知るべし。乳巖の証、右の通りなり。又、脇の下まで厚（ふと）き筋引きあらば、九分九厘まで治難きの証なり。故に相談を向い掛けて療すべきなり。口開き少しならば、右の通りに相談掛けるべきなり。多くは治難きの証なり。是、すなわち與が覚えに、これを少し粗く述べて記すなり。是、定方なり。（カッコ内はルビを参考にした松木の読み）

上の引用文に見るように、青洲は口を酸っぱくして、潰瘍を形成している症例、腋下に「筋引き」、すなわち転移のある症例は難治であり、手術を控えるように注意している。最初の乳癌手術例、藍屋 勘はすでに腋下に転移があった状態で手術が行われたから、この時点で青洲は未だ「再発」に関して何ら考慮を払うことはなかったと思われる。勘は乳癌の再発が原因で死亡したのではなくして、癌の進行に伴う全身状態の悪化によって死亡したからであった。しかし、1808年6月13日に手術を受けた紀州・山保田杉原村の重助の妻は、再発して同年11月晦日に再び手術を受け、さらに再々発して翌1809年2月12日に3度目の手術を受けている¹⁹⁾。このようなことから、青洲は、



図4 「乳巖不開図」

再発の問題に強い関心を寄せて、潰瘍を形成しているもの、腋下に転移のあるものは難治であることを認識し、このことを門人たちにも教えた。これを図で示したのが「乳巖不開図」、「乳巖少開図」、「乳巖大开図」の3図で、図4にそれらの一つ「乳巖不開図」を示した。潰瘍形成に至っていない初期の乳癌の一般的症例を示したもので、特定の患者、特定の時期の症例ではない。3図共に構図は同じで、「乳巖不開図」は向かって左から描いているが、「乳巖少開図」と「乳巖大开図」では正面から描いている。患部はそれぞれ右、左、右となっている。下半身につけている衣裳は3図とも同じで、この衣裳は「外科正宗」の「卷之一」に描かれた人物の図²⁰⁾に全体として近似している。このことから、これら3図は現実の患者を対象に具体的に描いたものではなく、乳癌の潰瘍形成について一般的に示した図であることが知られる。

4. 「婦人乳論翼目録」中の 全身麻酔下の乳癌患者の図について

麻沸湯による全身麻酔下の手術患者は図5と図6に示した。図中の説明文は読み難いので、以下に示しておく。

図5「乳巖療治切初之図」の説明文

- 乳岩、療為。魔薬ヲカケテ可レ療ス。(乳岩の療すること、魔薬をかけて療すべし。)
- 魔薬 魔沸湯 此薬吞気狂為、相身□筋而不痛知、可レ療也。(魔薬 魔沸湯。此の薬を吞ませて気狂にし、相(「総」の誤記)□筋にして痛みを知らず療すべし。)
- 切初、如レ此、筋付也。乳巖之塊之正上從付ル之ヲ。(切り初めは此の如く筋付けるなり。乳巖の塊の正上より之を付ける。)
- ドウグ、テア(不詳)、マキモメン、玉、白汁、酢、白雲



図5 「乳巖療治切初之図」

図6「乳巖療治切盛之図」の説明文

- 乳岩ノ塊リ少シニ而モ残又再作^{セン事ヲ}。手愈ニ療可レ為也。(乳岩の塊り少しにても残らば、又再作せん。手[「丁」の誤記]愈に療すべきなり。)
- 乳岩切^リ出^ス時^ヲ、如^ク此^ノ口^ヲ開^ケ塊^ヲ手^ヲ掴^ミ肥□(「ヒス」とルビが付されている。示す偏に傍の下に心が付く字で、「ス」と発音する字はない。これに近いのは、「禪」で、「シ」と発音するが、原文の字とは少し違うようである。)ニ而底^ヲ切取^ル也。此時、底ニ六骨有^リ大事也。乳岩之塊^リ少^シモ不^レ残。(乳岩切り出す時は、此の如く口を開け、塊を手で掴み、ヒスにて底を切り取るなり。此の時、底に六骨(肋骨)あり大事なり。乳岩の塊少しも残すべからず。)
- 如^ク此^ノ面^内チドリ卦^ヲ可^レ療。面内チドリト^ッ幌巾而結^之ナリ。(かくの如く、面内チドリを掛けて療すべし。面内チドリト^ッ幌巾(テノ

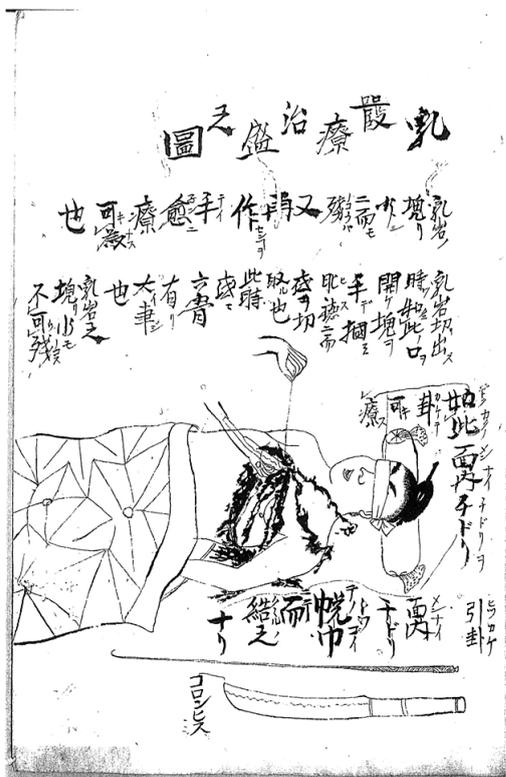


図6 「乳巖療治切盛之図」

コイ、手ぬぐい)にて之を結〔「括」の誤記ぶなり。)

○引卦 コロンヒス (コロンメスの誤り。上の「ヒス」も「メス」の誤り。「乳巖治験録」¹⁾には「古呂牟志津寿」とある。)

図5, 図6共に術者である青洲や助手たちが描かれていないが, これは説明文や手術道具を描くための余白を確保するために省略したと解される。「乳巖療治切初之図」と「乳巖療治切盛之図」は, 患者の向き (前者では頭は左, 後者では右), 目隠しの結び目の位置 (前者では右, 後者では左), 手術部位 (前者では左, 後者では右), 下半身を覆う掛け布団の模様, 手術道具の種類に違いが認められ, それぞれ異なった症例を描いた図であり, 上述した「乳巖不開図」, 「乳巖少開図」, 「乳巖大開図」の3図のように一般的, 観念的に描いた図ではないことが理解される。説明文も具体的である。図は決して見事に描かれたものではないが, 良圭自身の手によると考えられ, それだけ脚色, 誇張されたものでなく, 実際の状況を伝えていることが示唆される。

「乳巖療治切初之図」によって, 患者が目隠しをしていること (これは「乳巖療治切盛之図」の患者でも同じ), メスを入れる前に予定した切開創に目印の線を付けておくことが明らかになった。説明文中の「此の薬を吞ませて気狂にし」は, 麻沸散 (湯) による興奮期の状態を極めて適切に表現したもので, このことに言及した文献はない。見慣れない人が, 全身麻酔時の興奮期の状態を初めて見れば, 患者が「気狂」っているとしか映らないであろう。「白雲 (膏)」の名前が見えるが, 創部に当てる木綿に延べる軟膏である。「白雲膏」の処方は油, 白蠟, 唐土, 椰子油, 軽粉, 樟腦である²¹⁾。創口には, この写本の「乳岩準」の項に「封創口附此膏」とあるように「家猪膏」 (処方: 蜜蝋, 保留登加留, 松脂, 没薬, 乳香, 血湯, 猪油, 黄雞) を傳 (「附」は「傳」の誤り, 同音で口述を示唆する) して使用した。「乳巖療治切盛之図」では, 乳癌腫瘍の切除に際して, 「引掛け」, つまり鋭鉤で創口を広げ, コロンメスで

腫瘍の底部を胸壁から切除する様子を示しており, このように細かい手術操作を描いた図もこれまでにない。このように両図には, 実際の手術を見なければ知り得ない具体的なことが描かれており, 決して観念的に描かれた図ではないことが理解される。つまり, 図5と図6は良圭が春林軒で学んだ1813年から数年間の間に, 彼が実際に見学ないし経験した乳癌手術例を描いた図であることは間違いない。残念なことに, この写本は良圭自身の手になる原写本でないことに加え, 描かれた患者名, 正確な手術時期を特定できない。

5. 「婦人乳論翼目録」中の術直後の創部の図について

この写本では, 創部縫合の図 (図7) は「乳岩治療仕上図」の後に描かれているが, 時間的にはこの図が前に位置すべきであるから先に解説する。説明文を読み下し文にして示す。

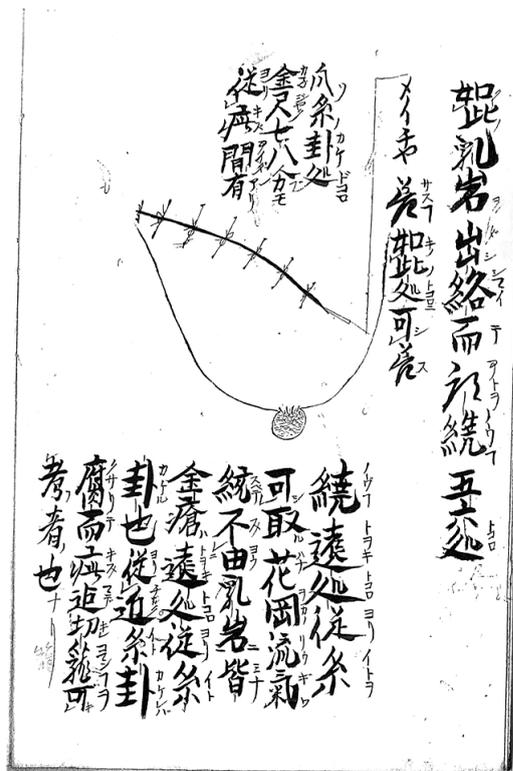


図7 縫合の図

- 如_レ此乳岩出終而跡繞五六処（此の如く、乳岩を出し終えて、跡を五六処縫う）（原文では「縫」でなく、誤って「繞」を使っている。）
- メイチャ 差如_レ此処可_レ差（メイチャ 差すこと、此の如き処に差すべし）
- 凡糸卦処金尺七八分_ニ從_レ疵間有（凡そ、糸の卦け処、金尺七八分も疵より間あり）
- 繞遠処從糸可_レ取_ル。花岡流氣_ヲ統不_レ由乳岩_ニ。皆金瘡_ヲ遠処從糸卦也。從_レ近糸卦、腐而して疵迄切籠可_レ考者_也。繞うこと、遠処より糸を取ること。華岡流氣（流儀のこと）は統て乳岩に由らず、皆金創は遠き処より糸を卦けるなり。近くより糸卦ければ、腐りて疵まで切れ籠る。考えるべき者なり。）

この図も、実際の縫合の結び目まで分かるように描いている。このように、結び目までも分かるように具体的に示した図はこれまでになかった。縫合法については「外科神書」にも図示されているが、結び方は示されていない²²⁾。ここでは蝶結びになっている。このような細かい点まで描くことは、実際の場面を見て経験していなければ描けない。針の刺入点を創口から離れた処に求めていることを「花岡流氣（流儀）」としていることも注目される。なお、メイチャ（名茶）は漢語「綿條」（めんちゃん）の訛言で、いわゆる込ガーゼである。「紐」（にん、じん）のことでもあるが、これは原意を離れた特殊な使い方である。

6. 「婦人乳論翼目録」中の術後の乳癌患者の図について

図8は術後、麻酔から覚醒した状態を示している。半座位の姿勢を取らせていることが注目され、このような乳癌手術後の様子を描いた図もこれまでになかった。先ず図の説明文を以下に示す。

- 此人_ヲ辺_リ開_ル無_ク屏風_ヲ立_テ當_ニ様_ニ可_レ為_ル也。當_ニ風_ニ忌_ム難_シ也。（此人の辺に開処無く屏風立て、風に当たらぬ様に為すべしなり。風に当たること難く忌むなり）
- 卷希_ハ如_レ此可_レ卷_ル七日如_レ此（卷希「希



図8 「乳岩治療仕上図」

は「布」の誤り。以下同じ]はこの如くに巻くべし。七日はこの如し)

- 風_ニ當_ル破傷風_{トナル}故_ニ可_レ忌_ム難_シ風（風に当たれば、破傷風。故に風を難く忌むべし）

6丁表から7丁表にかけての1丁半に、乳癌腫瘍を切除した直後からの処置、術後管理法が述べられている。

凡そ、乳岩の切り口、銀尺二寸六七分半切りて塊を出すべし。而して後に乳岩の塊少しも残さざる様に切り取るなり。又、後に少しにても残り有れば、又再作せん。是、能々考えるべき者。次に若酒を能く温めて、切り出した後を能々若酒を紙に取（ひた）して切り口の中迄洗うべし。次に、其後を繞（「縫」の誤り。以下同じ）うべし。切り口を繞うこと五六処繞うべし。次に△破敵膏△の名茶を繞止まり（切開創の端のこと）の処に扱（さ）すべし。その上を希（「布

の誤り。以下同じ)に雞子白汁を取(ひた)して張るべし。又、その上を希に酢を取(ひた)して張るべし。雞子の白汁の希三枚重ね張るべし。同じく酢の希三枚重ねて張るべし。其の上に白雲膏同じく希に延べて張るべし。白雲膏は希一枚、△雞子の白汁○酢の希張ること三日の間三品張る。△名茶○紙小捻△名茶抜きて膿血を搾(原文では手偏に愈の字が使われ、「しぼる」とルビが付されているが、此の字は辞書にないので、ルビにしたがって「搾」を使用する。以下同じ)ること張り替えする度に為す。張り替え朝夕。三日立てば○白雲○半(ばかり)張るべし。又、その膿血を搾ること膿血去るまで名茶を扱(さ)す。又、糸抜くこと七日してなり。惣じて金瘡の糸抜くこと、七日してなり。又、切り口癒えること五六十日にして癒ゆ。能々癒えば、その後堅くなり、その堅くなりし処を能々揉みおろして癒ゆべし。揉むこと廿日余、日に三度斗、又、切り口少しも癒えば、希にて此の如くの□(正方形の布の四方の隅に紐を付けた図)者の四隅に紐を付けて巻希を止めて、口癒えるまで是にて包むなり。背脇下へ此の紐を取るなり。

右の図の如き療治終われば、病人の辺に間処無く、屏風立て、大便、小便を虎子(おまる)にて取るべし。切り口大概半分の上までも癒えるまで動かすべからず。兼ねて又、手を動かし使うこと百五六十日の間、難くこれを忌むべし。切り口大概、本癒える迄、屏風を取るべからず。食する時、人に嘔ましめ、餠(のりす)るべし。手を動かすこと難く之を忌むべし。

乳癌手術の術後の管理法について、これほど具体的に記した記録はこれまでにない。創部に当てる鶏卵の白身木綿、酢木綿については、諸写本に記述されているが、創端に挿入するメイチャの交換や挿入期間、排便、排尿の仕方、患部のマッサージ、食事の方法、患者の周囲に屏風を立てることなど、これらは実際に現場を経験しなければ記述できない事項である。術後150日程も安静を保つことは今では無謀と評価されるであろうが、

術後に創部の感染が必発した200年前のことである。

いずれにても、「乳巖療治切初之図」(図5)、「乳巖療治切盛之図」(図6)、創部縫合の図(図7)、そして術後半座位の図(図8)は、観念的に描いた図ではなくして、良圭が直接、現場を観察し、あるいは経験して描いた現実的な図であることは間違いない。しかし、図7、図8が図5、図6のいずれの症例のものであるかはわからない。

7. 図が描かれた背景 ——1813~1818年間の春林軒における 乳癌手術——

「乳巖療治切初之図」(図5)と「乳巖療治切盛之図」(図6)はそれぞれ異なる症例を描いたと思われるが、残念なことに患者名と手術時期を特定できない。しかし、良圭は1813年4月21日に入塾しているから、それ以降の手術例であることは間違いない。前述したように彼がいつまで春林軒で修業したかは知られないが、長くて5年としても1818年までには退塾したと考えられる。いずれにしても、良圭は1810年代にこれらの図を描いたことになる。因みに良圭の入塾以降に行われた乳癌手術は、呉の著書に引用された「乳巖姓名録」²³⁾によれば、1813年は6例(九月既望の条に見える飛州高山 廣瀬屋利兵衛妻は1810年5月11日に手術を受けているので、ここからは除外した)、1814年には7例、1815年には3例、1816年には6例、1817年7例、1818年には7例であった。良圭の2症例の図は、これらの症例のいずれかを描いたものであろう。

8. 1810年前後の春林軒において行われた 手術の図について

前述したように、青洲は最初の乳癌手術例に関して、門人に図を描かせたのであるが、それ以降、乳癌手術時に図が描かれるようになった。当初の目的は「乳巖治験録」¹⁾の末尾に「これを同志に示すため、図を作りこれを識すという」(原漢文)とあるように、門人たちに示すためであった。しかし、青洲の当初のこのような考えは変化して

いったと推察される。このことは、門人赤石希范が1809年5月晦日に乳癌手術の一層の普及のために図譜の出版を目的に「乳癌図譜」を出版しようとしたが、この企画に対して青洲は賛意を示さなかった⁵⁾。この赤石の「乳癌図譜」には計23図が描かれているが、その殆どは患部と摘出された腫瘍塊、腫瘍の断面の図であり、全身麻酔状態を示した図ではない。1812年に作られた野村 鄂の「乳岩之図」（「青洲先生療乳岩記」と同じ²⁴⁾も23図を取めているが、すべて赤石の「乳癌図譜」⁵⁾の図と同じである。

1814年5月に濃陽の加納元謹が書写した「辨乳岩症并治法艸稿」には14図が見られるが、ほとんどは、赤石⁵⁾や野村²⁴⁾の写本に見られる図と重複し、最後の3図は飛州高山・廣瀬屋利兵衛の妻の乳房と摘出腫瘍塊の図であり、全身麻酔状態を描いた図ではない²⁵⁾。

京都大学附属図書館富士川文庫所蔵の「華岡氏治術図識」²⁶⁾は、呉の著書にも症例や図が紹介されている史料であるが²⁷⁾、書写者や書写年は知られていない。しかし、文中に「麻沸湯」ではなくして「麻沸散」の語が使用されていることから推察すると、1820年以前に成立したと推定される。「乳岩」の項で、1806年4月8日に麻沸散投与による全身麻酔下で乳癌手術を受けた摂州・大坂の河内屋清右エ門妻歳61の例（この症例は藍屋 勘に続く3番目の乳癌手術例であるが、「乳岩姓名録」には欠落している）を紹介し、5図を示している。この中の3図は乳房に切開を入れ、腫瘍を切除する図、1図は摘出した腫瘍塊、最後の1図は術後に胸に巻木綿をした患者の膝から上を平面的に描いている。万歳をした格好で、半座位を取ってはいない。

東洋文庫所蔵の「乳岩図説」²⁸⁾も、書写年は知られていないものの、内容的に赤石希范の「乳癌図譜」⁵⁾や野村 鄂の「乳岩之図」（「青洲先生療乳岩記」）²⁴⁾の図に11症例の図が追加された図譜である。追加の症例の内、8症例は顔面の疾患、2例は陰部疾患、1例は乳癌である。最後の図は讃州小豆島室村の長太夫の妻の乳癌手術で、図の説明に「讃州小豆島室村長太夫妻 歳五十一 文

化十有二歳六月十一日割之」とある。「乳岩姓名録」²⁹⁾には「(文化十二年, 1815) 六月五日 讃州小豆島寶村 長太夫妻」とある。「室村」は「室村」の誤記である。このことを考慮に入ると、「乳岩姓名録」の「(文化十二年, 1815) 六月五日」は春林軒に入院した日、そして実際に手術が行われたのは、この史料に記載された「六月十一日」であろう。この日付から推察して、この史料が成立したのは1815年以降間もないことが分かる。そして、この長太夫妻の乳癌手術に関して描かれた図は、患部と摘出腫瘍塊の2図で、いずれも全身麻酔の状態を示す図ではなかった。以上述べてきたように、現在披見される1810年代の乳癌手術を描いた図は患部と摘出標本の図が殆どで、麻沸湯による全身状態を示す図はなかったことが理解される。

9. 1810年代に描かれた 全身麻酔下の手術患者を描いた図の意義

世界的に見れば、外科手術に際して行われる何かしらの鎮痛手段を画材にした図は古くから知られている。例えば、Keyesはその著The History of Surgical Anesthesiaで、1513年の「スイス年代記」に描かれた一図を紹介している³⁰⁾。修道院の病院で一僧の右足趾の手術中にアルコール性の蒸気を吸入させている様子を描いた図である。僧の眼は開いており、全身麻酔の状態にあるかどうか疑わしい。1846年のマサチューセッツ総合病院におけるエーテル麻酔の公開実験は夙に有名であるが、その時の様子は1859年にHB Hallが銅版画の手法で忠実に再現した図が同年発行されたRiceの著書に掲載されており、いわゆる近代的な意味における「麻酔」の状態を描いた最初の図であるとされる³¹⁾。

一方、本邦では、全身麻酔の図に関しての研究は極めて少なく、わずかにDoteらが1840年に出版された鎌田玄台の「外科起癢図譜」³²⁾に示された2図、すなわち、陰囊腫瘍切除術（原図の第11）と子宮内出血塊除去術（原図の第48）を示して、全身麻酔を描いた図として少なくともMortonのエーテル麻酔公開実験より6年も先行するとして

いる³³⁾。「外科起癢図譜」には上記以外にも、多くの全身麻酔下にあると思われる患者の図が描かれている。ただし、患者名は知られているものの、手術の時期については不詳で、1840年以前であることだけが知られている。1812年3月に入門した鎌田玄台³⁴⁾が、春林軒での5年間の修業を終えて故郷に帰ったのは1817年であるから、上記の症例を経験したのは概ね1820年以降とみて大過がないであろう。いずれにせよ、鎌田玄台の手術図も1810年代の手術患者の図ではないことが理解できる。以上に述べたことによって、現在伝えられている良圭による手術図は、1826年に作られた模写ではあるが、麻沸湯を用いた全身麻酔状態を描いた最も古い図であるということが出来る。

おわりに

1813年に青洲の春林軒に入門した雨森良圭は、在塾中の1810年代に「婦人乳論翼」を記した。青洲の乳癌治療に関する口述を筆記し手術の様子を描写した記録である。その中に描かれた7図中の2図は麻沸湯による全身麻酔下にある乳癌患者の手術を描いており、良圭が実見した症例の図と考えられる。1810年代に行われた全身麻酔下の手術患者を描いた図はこれまでに知られておらず、この意味でこれらの2つの図は麻酔科学史的に重要であると考えられる。

稿を終えるに際して、貴重な史料と有益な情報を提供された長浜市の雨森正高博士に深く感謝の意を表す。また、「婦人乳論翼」の複写、転載などを許可して戴いた高月観音の里歴史民俗資料館(中山芳章氏)にもお礼を申し上げる。

参考文献および注

- 1) 天理大学附属天理図書館所蔵。請求番号 498-1
1. 図は欠落している。
- 2) 「乳巖治験録」の1丁裏に「一之図」、6丁表(乱丁があって5丁表になっている)に「二之図」から「四五之図」までのことが言及されている。「乳巖治験録」は以下の拙著にカラーで覆刻されている。
松木明知。華岡青洲の新研究。弘前：松木明知；2002。巻頭。
- 3) 呉 秀三。華岡青洲先生及其外科。東京：吐鳳堂書店；1923。p.265-266

- 4) 松木明知。「乳巖治験録」中の4枚の手術図に関する一考察。日本医史学雑誌2016；62(3)：295-304
- 5) 松木明知。春林軒門人赤石希范による乳癌手術図譜出版の計画。日本医史学雑誌2016；62(3)：305-317
- 6) 文献3。p.388—399
- 7) 堀内 信編。南紀徳川史(自百五十八巻至百七十巻)。和歌山：南紀徳川史刊行会；1933。p.179-242
- 8) 松木明知。奇患図の研究。華岡青洲研究の新展開。東京：真興交易(株)医書出版部；2013。p.171-249
- 9) 文献3。p.225
- 10) 文献3。p.464
- 11) 雨森正高氏の編になる「雨森家系図集覧」(高月：雨森正高；2005)によれば、雨森家は非常に古い家系である。雨森村雨森家の開祖(1世)は1156年(久壽3)に没した雨森良高で、雨森正高氏はその30数代の末裔である。13世良友の次男広常の末裔が雨森良圭で、雨森村の隣村柏原村に居住していた。
- 12) 雨森正高。華岡青洲に学んだ近江出身の“雨森良圭”。滋賀県医師会報1997；49(9)：30-32。
- 13) 文献11に示した「雨森家系集覧」。p.126
- 14) 文献3。p.381-387
- 15) 燈火医談前篇。大塚敬節、矢数道明編。近世漢方医書集成29(華岡青洲一)。東京：名著出版；1980。p.277-282
- 16) 「済美堂丸散方、乳岩準附録」(京都大学附属図書館富士川文庫所蔵。請求番号 セ89)中に「乳岩準」が含まれているが、「乳岩準附録」と誤っている。この後に「乳岩準附録」が披見される。1812年の写本を1824年に書写したものである。
- 17) 松木明知。千葉良蔵の「辨乳岩証并治法艸稿」と「乳岩辨証」(「乳岩辨」)。日本医史学雑誌2016；62(4)：429-437
- 18) 松木明知。華岡青洲の「乳岩準」および「乳岩準附録」の成立に関する一考察。日本医史学雑誌2017；63(1)：53-59
- 19) 文献3。p.275-276
- 20) 小曾戸 洋、真柳 誠編。外科正宗(和刻 漢籍医書集成 第十三輯)。東京：エンタプライズ；1991。p.50-58
- 21) 文献16所収「春林軒法方録」の「膏方部」による。
- 22) 松木明知。華岡青洲による「瘍科神書」の成立とその各種写本に関する研究。日本医史学雑誌2017；63(3)：275-292
- 23) 文献3。p.278-280
- 24) 松木明知。写本「乳岩之図」(国会図書館所蔵)の研究 一写本「青洲先生療乳岩図記」との比較一。日本医史学雑誌2016；62(3)：285-294
- 25) 鯖江市の山岸利明博士所蔵。本写本については下記を参照されたい。
松木明知。華岡青洲の「麻沸散」開発と日本にお

- る 19 世紀初頭の全身麻酔薬. 日本医史学雑誌 2016 ; 62(4): 413-428
- 26) 京都大学附属図書館富士川文庫所蔵. 請求番号ハ 83
この中に野村 鄂の「乳岩之図」(「青洲先生療乳岩図記」)の「医按」,つまり廣瀬屋利兵衛の妻の手術に至った経緯を記した記録を含んでいる.
- 27) 文献 3. p. 411
- 28) 東洋文庫(藤井文庫)所蔵. 請求番号 XV-1-1021
- 29) 文献 3. p. 279
- 30) Keys TE. The History of Surgical Anesthesia. New York: Schuman's; 1945. Figure 1.
- 31) Rice NP. Trials of a public benefactor as illustrated in the discovery of etherization. New York: Pudney & Russell; 1859.
- 32) 原史料は名古屋市岩瀬文庫所蔵. 最近, 土手健太郎によって下記のように覆刻版が作られた. 土手健太郎(覆刻者). 外科起癢図譜~平成復刻版~. 東温: 土手健太郎; 2014.
- 33) Dote K, Ikemune K, Desaki Y, and Yoroizuka T. Pre1846 Illustrations of a Patient Undergoing Surgery During General Anesthesia. Anesthesia Analgesia. 2013; 116(6): 1391-1392
- 34) 文献 3. p. 503

1810s Illustrations of Breast Cancer Patients under General Anesthesia: The Portrayal of General Anesthesia by Ryōkei Amenomori

Akitomo MATSUKI

Department of Anesthesiology, Hirosaki University Graduate School of Medicine

Ryōkei Amenomori, who entered Shunrinken in 1813, wrote and illustrated a manuscript in the mid 1810s called *Fujin-nyūronyoku*. The manuscript is a record of Seishu Hanaoka's lecture on breast diseases and the surgical treatment of breast cancer. There are seven illustrations. The fourth one portrays a breast cancer patient about to have surgery under general anesthesia with Mafutsutō. The fifth illustration portrays a woman in the middle of breast cancer surgery under general anesthesia, with much bleeding from the incision site. Ryōkei Amenomori must have observed these patients firsthand because the legends give the details of the operations. Since no 1810s illustration of a patient under the influence of Mafutsutō has been reported before, this manuscript is very important to the study of the history of anesthesia.

Key words: Ryōkei Amenomori, *Fujin-nyūronyoku*, Mafutsutō, breast cancer surgery, 1810s